
夏の落としもの

春野天使

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

夏の落としもの

【コード】

N1806A

【作者名】

春野天使

【あらすじ】

ある夏の日、少年は人魚に出会った…

(前書き)

ハギさん、河久屋さん、投稿前に読んで下さってありがとうございます。
ます。お二人の短編に影響を受けて、書いてしまいました！少し修正
正してます。これ以上どう修正したらいいか分からなくなったので、
とりあえず投稿します！

青い海の底は、音のない世界。

真夏の太陽が海面から降りそそぎ、色とりどりの魚達が群をなして泳ぐ。揺れる海草、海の底に広がる真つ白い珊瑚礁。

ゆらゆらと動く波間をぬって、一匹のイルカが踊るように泳いでいく。その後方から1人の少年がイルカを追って泳いでくる。イルカはウターンすると、少年に近づいていき、軽くその体を鼻先でつついた。少年はイルカの体をさすり、一緒に連れ立って海の中を泳いで行く。

少年とイルカは、明るい水面から太陽の日が射し込まない薄暗い岩場の方へ移動する。そして、ゆっくりと海の上へ上がっていき、顔を出した。辺りは洞窟になっていて、空気がヒンヤリとする。

少年は岩の上にあがると一呼吸した。暗い洞窟の向こうには、青い海と青い空が見える。太陽から遮断されたこの場所は、明るい海とは別世界のようだ。洞窟に吹き抜ける風は心地よい。

イルカも海面から顔を出し、笑うようにキキキと鳴いた。少年は、雫のしたたる黒髪をかき上げ、イルカを見て微笑む。夏休みに家族と訪れた異国の地で、少年はイルカと友だちになった。南の島の楽園で、少年は毎日イルカと戯れていた。

少年が海から戻って来ると、島の漁師達が岸边に集まり話をしていた。

「1人だけ生き残った男がいるそうだな」

「命からがら必死で泳いで逃げ延びたらしい」

「真つ青な顔して、ブルブルと震えてやがった」

漁師達の話では、数日前漁に出た船が転覆し、漁師のうち1人だけが助かって戻って来たらしい。

「そいつの話じゃ、船が転覆する前に、歌声を聴いたそうだ」

「歌声？」

「綺麗な透き通るような女の声で、吸い込まれそうなくらい美しい声だったそうだ。そしたら、突然嵐でもないのに、波が高くなってきたあつという間に船は転覆したらしいぜ」

「そりゃ人魚の仕業だな。人魚に惑わされちまったんだ」

「人魚？ 人魚なんていう生き物が本当にいるのかね？」

「いるとも。その男は、波の合間に光る魚のようなものを見たらしいぜ。そいつは人魚の尾っぽに違いねえ」

「信じられねえな。そいつは幻でも見ていたんじゃないのか？」

「そうかもな。だが、もうそいつからは詳しい話しは聞けやしない」

「なんでだ？」

「一週間うなされて苦しんだあげく、昨夜死んじまったのさ」

漁師達は、恐ろしげに黙り込む。

「人魚？……」

少年は漁師達の話、耳をそばだてて聞いていた。美しい姿をしているが、人の命まで奪ってしまうことのある人魚。噂では聞いたことがあつたが、本当にこの世に存在するのだろうか？

翌日も少年は、イルカと共に海を泳いだ。

真夏は過ぎ、そろそろ秋の風も吹き初めてきたようだ。夏のバカンスもそろそろ終わりを迎える。長い休みを異国の地で過ごした少年も、もうすぐ家に帰らなければならぬ。友だちになったイルカともお別れだ。今は、残り僅かな休みを思う存分楽しみたかった。

海中の散歩を、イルカと共に心ゆくまで楽しんだ少年は、火照った体を休めるために、今日も洞窟へと向かった。

洞窟の中はひっそりとしている。少年がゆっくりと海上に顔を覗かせた時、何か魚がはねるような音が近くで聞こえた。と、少年の目の前の岩の上に、誰かが座っていた。

腰まで伸びた金色の長い髪を垂らし、少年に背を向けて座ってい

る人影。濡れた髪の毛からは、雫がしたたり落ちていた。『誰だろう？』少年は不審に思い、その人物の方へ近づいて行った。この洞窟に泳いで来る人は、今まで見たことがなかった。

と、少年より早く、イルカがそこに近づいて行き、岩場の横で飛び跳ねた。

「キヤツ！」

イルカの姿に驚いたその人は、声を上げて振り向いた。

「あつ！？」

少年も驚きの声を上げる。振り向いたのは、裸のまだあどけない顔をした少女。透き通るような美しい白い肌をしていた。驚いたのはそれだけではない。少女の足が白い肌よりももっと輝く、七色に光る魚の尾をしていたことだ。眩しく輝くその尾の美しさに、少年は言葉を失う。

一瞬だけ、少女と目が合った。少女は怯えた目をして少年を見つめると、次の瞬間には、勢いよく海の中に飛び込んだ。水しぶきが高くあがり、七色の尾っぱが跳ねる。

『あれは、人魚？……』

我に返った少年が、慌てて海に潜った時には、既に少女の姿はなかった。海には、何事もなかったかのような静寂が流れる。

幻でも見たのだろうか？と少年は少女が座っていた岩場に行ってみる。確かにここに腰をかけていた。少年が不思議そうに岩場を見つめていると、イルカが水面から顔を上げて、キキキと鳴いている。口に何かくわえているようだ。

「これは？……」

少年はイルカの口から、平たい貝殻のような物を受け取った。それは、少女の尾のように、少年の手のひらの中で七色に輝く。

これは、魚の鱗？あの少女は人魚だったのだろうか？

それきり、あの少女は少年の前に姿を現さなかった。

「人魚を見た」と少年が話しても、誰も本気にはしなかった。こん

な人間の住む近くに人魚が現れる訳はない、人魚は人を惑わす不吉な生き物、もし目にしたら生きては帰れないと、皆話していた。

だが、少年は誰にも信じてもらえなくても構わなかった。あの人魚の少女のことは、自分の心の中にだけしまっておきたい。夏の日に一瞬だけ出会った、美しい人魚。あの姿を一生忘れない。

秋になり、少年は遠い国に帰って行った。人魚の思い出と、彼女が落としていった小さな鱗と共に……それは、人魚が忘れた夏の落としもの。少年の日の一夏の思い出として、永遠に少年の心の中に残ることだろう。

(後書き)

読んで下さってありがとうございます！

暑くて暑くて、なんとか涼しくなりたいと、書きあげた作品です。

(^^;)少しでも涼しい気分を味わっていただけならと思います。
初めての短編：あれこれ考えた割にもものすごく短い内容となりました。
短編もたくさん書いて、良い作品が書けるようになりたいと思います。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1806a/>

夏の落としもの

2008年11月7日07時08分発行